



記者から原研哉さんへ一言インタビュー

Q デザインとはなんですか。

A 今のデザインは色々あるが、目に見えない可能性を追求することだ。しかし、「わおー」とびっくりさせることが重要なわけではない。デザインは一つの本質を見ること。潜在するものを見る形にして、みんなで築きあげていくことだ。



記者から隈研吾さんへ一言インタビュー

Q 建築物と街との一体感とは？

A まずは、街のことを知ることが重要で、景観・歴史・産業からその町が今何をすべきかを考える。例えば国立競技場は、神宮にあり、森に囲まれている。特に高さ調整を重視している。神宮と森との一体感を見いだせるかが大切だと思う。

デザインと建築からみた

日本の美意識と観光資源

日本観光研究学会 2016年度全国大会シンポジウム

「森の時代」をテーマにした基調講演を行った新国立競技場の設計者でもある隈さん、1964年東京オリンピックの代々木体育館をデザインした丹下健三に憧れて建築家になった。丹下の建築は鉄やコンクリートが前面にでている。隈さんも鉄やコンクリートから始めたが、しだいに、森や木を使った新しい建築をするようになった。

事務所を設立したのは1986年のバブル時代の入り口だった。だが、45年でバブルは崩壊、そのため東京ではおよそ10年間建物が建てられなかった。そこで地方へ行った。初めに行った高知県梶原町で総合庁舎や雲の上ホテルなどを設計、木を用いた建築の原点が生まれた。「建物を主役にせず、景観を主役にする」建築思想だ。

2000年には、栃木県で馬頭広重美術館を設計していて貴重な発見をした。昔からの集落が里山のちよ

うと縁(へり)にあるのはなぜか。それは集落の暮らしを成り立たせる資源がすべて里山から供給されてきたからだ。里山を壊したら私たちの生活もなくなる。そのメッセージとして里山に正面を向け、いまある市街地を背にして美術館をつくった。

2012年には新潟県長岡市役所本庁舎に、木を多用した「ナカドマ」と呼ばれる屋根付きの空間をつ

このように、木をふんだんに使った新しい発想の建築で、町と自然が一体化し、地域を活性化するだけでなく、さらに観光客をも呼び込むことができるのだ。

デザイナーの原研哉さんは「未来資源としての日本」と題して基調講演を行った。

2020年の東京オリンピックが話題になっている。今、1964年の東京オリンピック時と比べ、日本の名目GDPは約18倍になっている。しかし、現在の課題は経済成長が止まってしまったことだ。

その解決方法のひとつとして観光がある。1964年の世界の国際観光到着客数は約1億人。現在は約11億人。2030年には、約18億人に達すると推定される。21世紀最大の産業は観光だ。

ところが残念なことに、日本は順調には行かなかった。2008年のリーマンショック、2011年3月11日の東日本大震災があって訪日外国人旅行者数が減ってしまった。2015年には1973万人まで回復しているものの、イタリ

アの5073万人、フランスの8445万人には及ばない。

日本の観光資源はフランスに負けていない。文化には独創性がある。8000万人来日してもおかしくない。そのためには、これからの観光は、物から無形の価値を提供するよう

に転換することが必要だ。日本は国土の大半が山・温泉で囲まれている。素晴らしい自然がある。さらに、それぞれの地方に独自の文化があり、アクセスするための新幹線も九州から北海道まで開通している。

環境・住居・身体に向けて成熟した日本のテクノロジーを使えば、世界で評価される美意識が甦ってくる。ハードはすでにそろっている。これからはソフトの部分でいかに観光資源を開発していくかがデザイナーとしての課題である。

12月3日(土)に江戸川大学で開催された日本観光研究学会で、デザイナーの原研哉さんと建築家の隈研吾さんが、日本人の美意識と観光資源について基調講演を行った。(文:小林英輝 撮影:有田拓)